

子どもたちを取り巻く現代の問題

～保育の視点立って～

保育を行うということは神様が私たちに求めている「愛」の働きであると思います。クリスチャンであるなしに関わらず、保育の働きをする者たちは「愛」の精神をもって「愛」の行動をしているのだと私は思います。保育は主イエス・キリストの心と行動の実践であると確信しています。

1. 保育をすること

子どもたちに人はこのように生きるべきであるという命の有り方を伝えるのが保育です。保育者は、人間はどのような生き方をしなければならないのか、人間は如何にあるべきなのかということは主キリストによって明確に示されています。お互いに「愛し合って生きるのが人間の生き方である。」ということです。そのように生きるために私たちは「愛する」という精神と行動をもって生きなければならないと主は教えて下さいました。保育をすることとはこの神の業を行っていることだと私は思います。私たちが、命が与えられた理由の一つは子どもたちの命と、その成長を支えることです。これは人間の命の存続にとって絶対に必要なことです。もし、私たちが自分の子どもたちの成長を支えらなくなってしまったら人間は滅びてしまうと思います。保育は人間の命の存続に直結している重要な働きなのです。社会が変わったとしても神様の愛に基づいた保育は変えてはいけないことであると思います。これらのことを念頭に置いて今の私たちの日本の社会はどうか考えたいと思います。

2. 子どもたちをとりまく社会的問題

今私たちの子どもたちを取り巻く大きな課題は少子化社会であること、児童虐待が頻繁に起きている社会、相対的貧困の社会、子どもたちが体を自由に動かすことの出来る遊び場は喪失し、代わりにゲームやスマホなどが子どもたちに広く浸透した社会になっていてこれらの問題が子どもたちを取り巻く重大な問題になっています。今の日本の社会は子どもたちにとって決して良い状態になっていないと言えないと思います。今の社会は経済優先であり、経済が良くなることだけが重要であり、人間の有るべき将来の展望を思い浮かべることが出来ない社会になっているように思います。生きていることを喜んでいるというよりも、毎日生活することに四苦八苦している社会状況になってしまっているようです。

2-1. 少子化社会

少子化社会について考えます。保育に於いては人口密集地の都市部では待機児童があり、保育園を利用できない家族が非常に多くなっています。反面、地方では子どもの数が少なく、そのために特に公立の保育園の閉鎖や民間への委託が進んでいます。また少子化による施設経営が困難になっている民間の施設も多くなってきています。このまま少子化が進んでいけば定員 100 人未満の小さな保育園の経営は非常に困難になってくると思います。保育士不足が問題になっていますが、逆に保育士が過剰のなることが近い将来問題になってくるでしょう。閉園する保育園が増加し、合併や、大規模法人に吸収される保育園が多くなるかもしれません。保育園はより保育の質が利用者から求められる時代になると思います。保育施設の経営は保育だけでは困難になり、保育以外の事業を行う施設が多くなると思います。保育士の働きはさらに高度な働きが求められ、ソーシャルワークやケースワーク、グループワークの能力がより求められます。そして、子どもと家庭を一体とした支援が求められる時代になります。ほとんどそのような状況になっています。人口が密集し子どもが多い都市部周辺では保育施設は拡大化し、子どもの少ない地方では逆に小規模化することになると思います。保育園と認定こども園が併設されていますが、認定こども園が増えてはいますが、利用者が求めている保育は保育所の保育であり、子どもの成長にとっても就学前のアタッチメントや非認知的能力を高める保育の方が重要であることが研究確認されていますので、制度がこのままであるなら、保育園の方が数は多くなり、幼稚園が認定こども園の移行が完了した時点で認定こども園は頭打ちになるのではないかと私は思います。ただし、行政が再度制度を見直すなら、どのようになるのかは予測が付きません。現状のような幼稚園、保育園、認定こども園とありますが、これらは行政も含めて一体化すべきだと思います。現在、文部科学省、厚生労働省、内閣府と3カ所が関わっていますが、それぞれが予算要求していますので、無駄な部分もかなりあると思います。施設を変えるより行政が合理的に変化しなければ適切な子どもたちのための政策は行えないと思います。ただ、明らかな事は、経済優先で大企業指導型の社会状況がこのまま変化することが無いのなら子どもが生まれない少子化社会はもっと進むのではと予測します。

2-2. 児童虐待

児童虐待の件数は毎年増加しています。しかも、その虐待によって命を失ってしまう子どもたちが増えているのです。普通の私達には考えられないような虐待事例が報道されています。8月31日の朝日新聞では2字曲線のように増加する児童虐待数のグラフが掲載されていました。そして身体的虐待、性的虐待、ネグレクト、心理的虐待の中で心理的虐待が一番多くあったということです。普通地球上の動物の母親は自分の命を犠牲にしても自分の子どもを守ります。これは地球上の生き物たちにとっては当たり前のことです。自分の子どもを虐待しその命を奪ってしまう生き物が人間であることに衝撃を感じてしまいます。私たちの精神はどこか壊れかかっているのかもしれない。虐

待ってしまった親たちを支える隣人が無く、その親たちは自分の行為がどのような行為なのか理解できない社会環境が私たちの身近な環境なのです。私達の心が、命の大切さを認知できないくらい人間としての生き方を見失ってしまっている人が増えているということです。人間の心が荒んで愛の心を知らない人、どのような行動が愛情なのか、他者を思いやることが出来ない人たちが増えているのだと思います。信仰を持っていない神様の真理を追究しない人間の末路なのかもしれません。

このような社会の中で保育園は子どもたちの成長を支えることによって、生きる喜びを多くの人たちに知らせ、それぞれが生きる希望を持つことが出来るように子どもたちの保育を行っています。そして私たち自身が自ら希望を持ち、今を喜び、楽しみ、生きていることが大切なことであることを自ら実践することが必要なのです。キリスト教保育を行っている施設では、ほとんどの職員は信仰を持っていませんが、保育を通して神様の愛を知り、感謝し、祈ることが出来るなら信仰を持つことが出来ると思います。

2—3. 相対的貧困

もう一つの問題は貧困です。この貧困は絶対的貧困ではなく、相対的貧困です。相対的貧困とは大勢の他者の生活と比較した場合、その生活レベルを下回っている生活をおくらざるを得ない状況のことを相対的貧困状態と言います。もっと具体的には、全世帯の平均年収のその半額以下で生活している世帯を相対的貧困家庭と定義されています。日本では全世帯の16%近くが相対的貧困状態にあるのだそうです。具体的には年間で、約120万円以下で生活している世帯です。このような家庭は3食の食事ができない、給食費が払えない、就学旅行に行くことが出来ない、進学が出来ない等の生活をしているのです。ここで子どもたちが家庭の経済状況によって能力があっても希望する教育を受けることが出来ないのです。貧困状態から抜け出すことが出来ず、厳しい生活をおくらざるを得ない世帯が全体の16%近く存在しているのです。少子化が進んでいるのはこの貧困の問題も関係していると思います。新たに子どもを育てる生活の余裕が無いのです。日本では子どもを育てることは家庭の経済に大きな負担があります。それを軽減する為に父親も母親も働かざるを得ない社会が私たちの日本です。働き方改革という政策が有りますが、この政策は生活弱者を救済するのではなく、置き去りにする改革のようにしか思えません。派遣労働はさらに多くなりこの傾向はますます強くなっています。いくら働いて苦しい生活から脱却できず、結局子どもたちの教育費を削り、切り詰めた生活をおくらざるを得ない社会になっています。そして、この生活に耐えられなくなってしまうわが子を虐待してしまうということもあるのです。

保育園は家庭の経済状態に関係なく誰でも保育を受けることが出来るセーフティネットの制度になっています。家庭の経済状況によって保育料の負担は異なっています。

認定こども園を利用している1号認定の子どもたちにも適用されています。全ての子どもたちが優れた保育を受けることが出来る制度は非常に重要であり、出来る限り継続しなければなりません。子どもたちが自分の家庭が貧困家庭であることを意識するのは中学生の頃が一番多いようです。勉強したくても進学できない環境にある時、自分の将来の夢をあきらめざるを得ない時に自分の家庭の現実を知るのだと思います。政府が取り組もうとしている教育の無償化は、このような点を考えると必要な制度であると思います。しかし、必要な政策は労働報酬がその量と内容に見合った報酬となるような社会にすることです。現状は子どもが欲しくても経済的な理由により子どもを持たないことを決断してしまう社会であってはならないのです。

2-4. スマホの問題

もう一つ重要な問題があります。それは子どもたちがスマホを使用することです。スマホは確かに便利です。人間社会にもうすでに広く浸透してしまっています。都市部の小学生では50%以上がスマホを使用しているそうです。このスマホは子どもたちの脳の発達に重要な影響を与えているという研究が行われています。東北大学の東北大学加齢医学研究所所長川島龍太教授の研究は仙台市内の小学生を300人ピックアップし脳の発達について経過観察を行った結果、スマホを使用せず全く勉強しないこどもと、スマホを2時間くらい使用するが勉強も2時間くらいしっかり行う子どもの学力の経過を観察した結果、スマホを使用しない子で、全く勉強しない子の方が、勉強をしっかりするがスマホを使用する子より学力が向上するという結果になったのです。これはスマホの使用によって、せっかく勉強した知識が消えてしまうのです。スマホの使用が勉強した知識を消してしまうのです。結局、スマホによって子どもたちの脳が発達しなくなってしまうということが明らかになったのです。スマホは、子どもたちの脳の発達を停滞させ、脳の成長を抑制してしまうのだそうです。とくに幼い子どもにスマホを与えてはいけないと川島教授は警告しています。しかし、スマホは全世界に行き渡ってしまいました。いま、これは使用してはいけなくともほとんどの人たちは聞く耳を持たないでしょう。特にラインの使用は脳に大きな影響があるそうです。大人がしっかりと管理する必要があるのです。私たちもこの事実を重く受け止めなければなりません。1時間以上スマホを子どもたちに使わせてはいけないことを多くの保護者に伝えなければなりません。スマホは非常に便利ですが、子どもにとっては脳の発達を阻害する最悪の機材に他ならないのです。これは放射能と同様に危険な物なのだという認識を持つべきです。

3. その他の問題

子どもたちを取り巻く多くの問題が存在します。世界では戦争やテロによって命を失ってしまう子どもたちが非常に多くいます。戦争等によって両親を失い、住むべき家も

なく、明日を生きる希望の無い、その日の食べる物もない子どもたちがどれだけいるのでしょうか。悲惨な状況で、いつ死ぬか分からない環境の中で、自分の命を必死に守ろうとしている子どもたちが非常に多くいることも私たちは知っています。大人によって自爆テロを強要された子どもたちもいるのです。難民となって当て所なく彷徨う子どもたち、笑顔もなく、無表情で何をどうしたら良いのか不安だけが取りついているような子ども達がいることを私たちは知っています。しかし、このような子どもたちに対して直接私たちは保育できる手立ては持っていません。このような世界になってしまった責任は私達にも有るのだと思います。

いま、私たちに出来ることは、自分の近くにいる子どもたちを保育の働きによってその命を守りその成長を支えることが、私達一人ひとりに課せられた神様からの使命なのだとは信じています。いつの時代であっても保育の本質は変わり有りません。人間は如何にあるべきなのか、それは神様が私たちに教えて下さっている「お互いに愛し合い、支え合って生きること。」そして神様によって「それぞれの命が支えられていること。」この神様の教えを忘れてしまった時、人間の命も失われてしまうということです。保育は神の働きであり、そして神の愛の具体的な表現であり、その実践であることを私たちはしっかりと確認したいと思います。そしてこの保育の働きを守り、支えているのは教会であり、礼拝を守っている私達クリスチャンの祈りであることを確認したいと思います。

スマホの問題について川島教授がネット上に、ご自分が調査、研究されたことが分かり易く掲載されています。

その文章をそのまま引き続き掲載させて頂きますのでご覧ください。

脳科学者・川島隆太教授が警告「子どものスマホ使用で2時間以上の勉強効果が消える！」

文／川島隆太（脳科学者）

あなたは自分の子どもにスマホを使わせていますか？なんと、長時間のスマホ使用で、2時間以上の勉強効果が消えてしまうという恐ろしい研究結果が出たのです。ちょっとだけ“怖くなる”けど、知っておきたい子どもとスマホの関係を、あの脳トレで有名な脳科学者・川島隆太教授に聞いてみた。

悩む親が多い、子どもとスマホの付き合い方

暇さえあれば、スマートフォン（以下＝スマホ）片手に動画やゲーム、メールやLINEのやりとりをしている我が子を見て、「こんなにスマホを触っている時間が長くて大丈夫なのか……」と、不安に感じているおやごさんは多いことでしょう。

その漠然とした不安は、的中しています。というよりも、予想をはるかに上回る悪影響を子どもたちに与えていることが、科学的にわかっています。

拙著『頭のよい子に育てるために3歳から15歳のあいだに今すぐ絶対やるべきこと』で明らかにした、スマホが子どもたちに与える驚くべき影響について、ここではお話していきたいと思います。

私が所長を務めている、東北大学加齢医学研究所では、平成25年に初めてスマホに関する子どもたちへの影響について、本格的な調査を行いました。

その衝撃的な結果を先にお伝えすると。

スマホの長時間使用で「2時間以上の勉強効果が消える」ということが判明しました。

もう少し詳しく説明すると「スマホをほとんど使わない、まったく勉強していない子」よりも「スマホを1日4時間以上使用していて、自宅で2時間勉強している子」たちのほうが、成績が悪いという結果が出たのです。

これはいったいどういうことなのか、私たちはその後も2年間、追跡調査を行い、スマホと子どもたちの成績との相関関係を調べていきました。

すると、

- ・スマホを1日1時間以上、使い続けた子どもはどんどん成績が下がった
- ・もともと成績が良かった子も、スマホを使い始めると成績が大きく下がった
- ・スマホをもともと1時間以上使用していて成績が悪かった子が、スマホ使用をやめる、もしくは1時間未満に抑えたら成績が向上した

このようなことがわかったのです。

どんなメカニズムなのかはさておき、子どもがスマホを使うと成績が下がる、「学校で勉強したことが頭から消える」ということがはっきりしたのです。

スマホに限らず、タブレットなどによるインターネット使用時間と学力の関係を見ると、使用時間を1時間未満にすると、成績への影響が少ないこともわかっています。使用時間を制限できる子どもは、生活をコントロールする意思が強く、スマホの誘惑に負けない能力があるから成績がさほど下がらないのでは、と考えられます。

ところが、調査を進めるうちに、時間制限も意味をなさない例外が見つかったのです。

それが、LINEです。平成26年に、LINE等の使用時間と学力の関係を調べたところ「使ったら使った分だけ成績が下がる」ことがわかりました。勉強時間や睡眠時間など、他の要因との関連をかんがみても、同じ結果でした。

どれだけ勉強しているか、どれだけ寝ているかに関係なく「LINEを使うと直接的に成績を下げる」ということが分かったのです。

さらにLINEは「使用時間が1時間未満であっても成績を下げる」ことも調査で判明しました。

スマホで脳がフリーズする

私たちはスマホ、LINE等が学習効果を消してしまう原因を解明するために、いくつかの実験を行いました。

そのひとつが、脳の血流を計測する装置をつけ、脳血流の変化を調べるという実験です。

被験者には装置をつけたうえで「辞書を使って言葉の意味を調べる」とことと「スマホでウィキペディアを使い、言葉の意味を調べる」という作業をやらしてもらいました。

すると、辞書を使う場合には、思考するときには活発になる大脳の「前頭前野」の血流が増えることがわかりました。一方、スマホを使った場合には、逆に前頭前野の血流は減少し、抑制がかかって働かない状態になったのです。

つまり、私たちがスマホを使っているとき、その間、脳は血も通わず働かず「ゆるみきっている」ということです。

ゆるんでいるということは、リラックスしているということだからいいのでは？ と不思議に思う人もいるかもしれませんが、しかし、発達期にある子どもの脳にとっては、これは悪影響でしかありません。

脳をしっかり使って鍛えることが重要な時期にあるため、脳が休息状態になる時間が長くなると、当然、脳の発達、働きは低下してしまいます。

LINE で情報処理速度、注意力が落ちる

私たちの実験によって、脳科学的な要因のほかに、LINE による成績への悪影響に関しては、心理学的な原因があることもわかりました。

大学生に、背後に自分のスマホを置いて、継続的な作業を行ってもらったところ、LINE の通知音が鳴るたびに、情報処理や動作速度が遅くなり、注意力が低下したのです。

この結果から「誰かからメッセージが来た」という認識が、学習効果を削ぐことにつながっているということが明らかになりました。

ちなみに、通常の時間を知らせるアラームが鳴ったときには、影響はありませんでした。

子どもたち自身に気づいてもらう

私たちの調査では、子どもたちは勉強中に LINE や動画、音楽やゲームなど、スマホで複数のアプリを利用している「ながら勉強」をしていることもわかりました。

「動画を見ながら勉強ができるの!？」とびっくりされる方も多いと思いますが、現代の子どもたちの「マルチタスク」（複数の処理を同時に行うこと）の巧みさには驚かされるばかりです。

しかし、当然ながら複数アプリを使いながらの勉強は、成績を大きく落としてしまうことにつながっています。

私たちが、勉強中に使用したアプリの数によって、4教科の平均点がどうなるかを分析したところ、アプリの数が多いほど成績は下がる、ということが明らかになったのです。

子どもたちは勉強どころか、アプリさえひとつのことに集中できていないのです。「何にも集中できていない」というのは、脳の発達において最も悪影がある、とも言えます。

子どもにスマホとの関係を考えさせる

さて、ここまでの調査結果をみて皆さんはどう感じられたでしょうか。

私がこの解析結果を見たときの第一声は「うわっ！！ こわっ！！」です。こんな恐ろしいデータを見たことはありませんでした。

今すぐスマホを子どもからとりあげますか？ 今やスマホは社会の「必要悪」になっています。学校のお友達、部活の連絡、すべてメールやLINEが主流であるというのは、よく聞く話です。そんな社会的な情勢の中「スマホ禁止」と頭ごなしに言っても、子どもは反発するだけです。

川島隆太著『頭のよい子に育てるために3歳から15歳のあいだに今すぐ絶対やるべきこと』（アチーブメント出版）

では、どうすればいいのか？

私子どもたちに向けて講演会をするときには、まずはこれまでにお話したような科学的なデメリットを伝えます。そのうえで、スマホを使うメリットと比べて「どう使えばいいか？ を自分たちで考えてください」と話しています。すると、子どもたちはたいてい「友達とコミュニケーションが取れる」と言います。

ところが「スマホなしで友達といい関係はできないですか？」「スマホでつながっている友達と、スマホなしでつきあっている友達との関係性に違いはありますか？」という質問を投げかけると、子どもたちは自分で「スマホと友達付き合いとは関係なさそうだ……」と気づいていきます。

こうして機会をつくってあげれば、子どもたちは自分自身でスマホとの正しい付き合い方を考えるわけです。ぜひ、ご家庭でもこうした機会をつくってください。

そして、おやごさん自身も、子どもたちと一緒にいるときには、スマホを遠ざけてください。ご自身がスマホ中毒にならないお手本を示してあげることが、子どもたちが正しい道を選ぶ力を育むことにつながるはずです。

川島隆太（かわしま・りゅうた）◎東北大学加齢医学研究所所長 スマート・エイジング国際共同研究センター長。東北大学大学院医学研究科修了、スウェーデン王国カロリンスカ研究所、東北大学加齢医学研究所助手、講師、教授を経て、2014年より同研究所所長。任天堂DSゲームソフト『脳を鍛える大人のDSトレーニング』、学習療法を応用した『川島隆太教授の脳を鍛える大人の音読ドリル』シリーズ（くもん出版）などで一躍、時の人に。人の脳活動の仕組みを研究する「脳機能イメージング」のパイオニアであり、脳機能開発研究の国内第一人者。研究で得た知見を産学連携に応用、その実績から総務大臣表彰、文部科学大臣表彰。『脳が活性化する大人のおもしろ算数脳ドリル』（学研プラス）など著書多数。